

# 二〇二二年度 入学試験問題

## 国 語

### 第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

働いている場合であれ、遊んでいる場合であれ、あるいはそのほかの活動を行っている場合であれ、わたしたちの活動はつねに世界のなかで行われている。そして、わたしたちの活動が行われている世界は、まずは、見たり、聞いたり、触<sup>さわ</sup>ったりといったさまざまな感覚様相をもった<sup>(1)</sup> 知覚経験のなかで現れている。わたしたちが目覚めて生きている限り、わたしたちの生活は知覚世界のなかで営まれている。生きていることは、知覚世界のなかで生することにほかならない、といえるだろう。以上はまったくの自明な事実の確認にすぎない。しかしわたしたちが生活を営んでいるあいだ、つねに知覚世界のなかで生きているという事実<sup>(2)</sup>に注意を向けることはまずないだろう。自明で暗黙<sup>あんもく</sup>の前提とされているからである。

A、たとえば何らかの理由で視覚を失ったとすると、わたしたちは視覚世界を失うことになり、それまで自明だった視覚世界の存在は自明でなくなり、経験は大きな危機に陥<sup>おちい</sup>る。危機に陥ったひとは、その危機を乗り越えて新たな世界のあり方のなかで経験を再構築する作業に立ち向かうことになるが、その作業は多くの「コンナンを伴うだろう。<sup>(2)</sup> こうした事情があるために、「わたしたちはつねに知覚世界のなかで生きている」といえるにしても、その世界のあり方は多様であり、一概に語ることはできない。しかしここでは、ひとつのモデルケースとして、五感を備えたひとに現れる知覚世界を「ネットウ」において話を進めることにする。

わたしたちの日常経験の多くは、こうした知覚世界のなかに現れている特定の対象に注意を向けることによって成立している。

B、大工が家を建てる仕事をしている場面を考えてみよう。木材を組み合わせて釘<sup>くぎ</sup>を打っているところだとする。釘を打つという作業は、材料の木々を前にして、釘を手に持ち、ハンマーでそれを木材に打ちつけることから成立しているのだ、少なくとも、目で釘や木材を見、それらに手で触り、ハンマーが釘に当たる音を聞く、という知覚経験と、それに伴ってジッゲンされる身体行為<sup>しんたいけいゐ</sup>が中心となっている。この時、これらの経験の対象は、釘（と木材）であるが、その経験は、少なくとも視覚、触覚、聴覚といった感覚や、姿勢を整えて体を動かすという、自己受容感覚や運動感覚が動員されて成立している。したがって、この過程で、経験の対象は同じだけれど、その対象をどのように経験しているかは、そのつど多様であ

る、といえるだろう。

この意味で、大工の作業において多様な知覚経験が成立しているといえるが、大工はこれらの<sup>(3)</sup> 経験のあり方に注意を向けることはない。注意はもっぱら対象である釘や木材に向けられており、それらがいかに経験されているかは背景に退いている。実際、自分が釘を見たり触ったりしている感覚のあり方に注意を向けていたのでは、作業はストップしてしまうだろう。まして、こうした対象に関わって作業している場が、知覚世界のなかで成り立っている、といったことに意識が向かうなどということは、まったくないだろう。先にも述べたように、こうした点に意識が向くとすれば、それは、視覚や聴覚などの感覚に異常が発生する場合のように、経験のあり方が危機に陥る場面だからである。少なくともそうした危機的状況<sup>じゆうききょう</sup>に陥っているでなければ、つまり、日常性が成り立っている場合には、知覚世界の存在は背景に隠れ続けている。

ここで話を先に進めるために少し整理しておきたい。

ここであげた例からも分かるように、知覚経験には、なんらかの対象に関係しているという点で「なにを」に関わる側面と、その対象をどのように経験しているかに関係する点で「いかに」に関わる側面が備わっているといえる。前者を経験の対象的側面、後者を経験の感覚・感情的側面と呼ぶことにしたい。通常の経験では、もっぱら対象的側面に注意が向けられており、感覚・感情的側面は背景に退いている。後者に注意が向けられるのは、何らかの障害に襲<sup>むさ</sup>われ、経験に危機が生じてくる場合が典型例であるが、必ずしも危機的状態ばかりではない。<sup>(4)</sup> 日常生活のなかでも場合によっては、この側面が浮き上がってくる場合がある。以下ではそのような経験の例を考えてみたい。

わたしたちの生活のなかで、見たり聞いたりといった知覚経験が、それだけ単独で際立つことは少ない。先の大工の例でも明らかのように、見たり聞いたりといった知覚の働きは不可欠であるが、そこではもっぱら「なにを」認知するかが重要であり、それを「いかに」経験しているかは、少なくとも第一義的には問題にならないからである。それでも、日常生活のなかには、時には、「いかに」経験しているかが際立つ機会が訪れる場合もある。

たとえば、仕事帰りの夕方、帰宅途中にちょうど夕日が沈むところで、空が茜色に染まっている景色に出会うと、思わず足を止めたくなるだろう。

あるいは、普段あまり聞いたことのない鳥の鳴き声を耳にすると、何の鳥だろうかと気になって、聞き耳を立てることがある。このとき、わたしたちは、たんに夕空について、ないし、鳥について、見たり聞いたりすることによって、それらの色や音についての情報を収集しているだけではな。つまり「なにを」見て聞いているかに関心が向けられているだけではなく、「いかに」見えているか、聞こえているかに関心が向けられている。あるいは、色や音の現れ方に注意が向けられ、その美しさや心地よさを「感じて」いる」ということもできる。「感じている」あるいは「フィーリング」といいたくなるのは、この経験では、対象だけではなく、それを経験している自分自身のあり方もまた経験していることに含まれているからである。このような場合には、その場に立ち会っている自分のあり方も含めて、夕空の美しさを楽しんでいる、とか、鳥の鳴き声の心地よさを楽しんでいる、といえるだろう。

<sup>5)</sup>ただし、この場合、美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった、というだけではない。

C、夕焼けの空が茜色に見えるとき、その色はどのような現れ方をしているのだろうか。空の色の現れ方は現象学的心理学者のD・カツツの分類によれば、「面色 (Glim color)」と呼ばれ、日常的に目にすることの多い物の色である「表面色 (surface color)」から区別される。表面色の場合には、そこに堅い表面が存在しているように、抵抗感をもって感じられるのに対して、面色は、そのなかに入って行けるような柔らかさを備えているように感じられる。表面色と面色は異なった奥行きを示すのである。

実際、夕焼けの空の色の場合も、そこに大きな壁があつて色が塗られているように見えるのではなく、はっきりしない奥行きをもった空間性を備えて色が見えている。D、その色は、見ているものと対立して存在しているのではなく、むしろ見ているものをそのなかに包み込むような空間性をもって現れている。似たようなことは鳥の鳴き声の場合もいえるだろう。鳥の鳴き声は、自動車の走り去る音とは違って、固定した音源から聞こえるのではなく、一か所から発しているにもかかわらず、その声の広がりがある空間性を「ケイセイし」、声のもつ「カイカツ」が聞くものを含んだ環境全体に広がっているように感じられる。

したがって、これらの経験では、茜色の醸し出す雰囲気の中に自分も含まれている、あるいは、鳥の鳴き声を作り出すすがすがしい環境のなかに

自分も含まれている、こうした感覚をともなつて、空の色や鳥の鳴き声を感じとっている、といえる。このときの自分に対する意識の仕方は、いま自分は何をしているのか、といった具合に、はっきりと自分を対象として反省するようなあり方をしていいるのではなく、むしろ、その場に居合わせ包まれているという意識、あるいは少し大げさかもしれないが、その場で生きていいるという意識のあり方を示している、といってもよいだろう。ハイデガーやメルロ・ポンティのような現象学者の言葉を使うと「世界・内・存在」していること、感覚、あるいは、感じ方といつてもよいかもしれない。

★自己受容感覚……わたしがわたしの四肢や姿勢全体についてもついでに内的な位置感覚。  
(村田純一『哲学』はじめての一步 楽しむ)

問一 —— (1) 「知覚経験」とありますが、知覚経験にはどういう側面がありますか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問二 —— (2) 「こうした事情」とありますが、これはどういう事情ですか。解答らんに四十字以内で説明しなさい。

問三 —— (3) 「経験」とありますが、これはどういう経験ですか。「経験」という言葉に続くように、本文中から五十五字以上六十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

## 問四

——(4)「日常生活のなかでも場合によっては、この側面が浮き上がってくる場合がある。」とありますが、この場合の例としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長い昼寝から目が覚めたとき、部屋の中には茜色の夕日が差し込んでいて、とても綺麗だと感じた。

イ 夏休みに家族で海に出かけたとき、浜辺で水遊びをしながら遊んでいて、太陽の眩しさが目に染み込んだ。

ウ 美術館で絵画を鑑賞しているとき、特定の年代の作品群に興味を持ち、いくつもの絵を比較しながら鑑賞した。

エ 夜中に満天の星を眺めているとき、幻想的な夜空に心を惹かれ、自分も星の一つになったような気がした。

## 問五

——(5)「ただし、この場合、美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった、というだけではない。」とありますが、「美しい色を見たり、心地よい鳥の声を聞いたりしている自分が楽しい気分になった」という具体例では足りないと思われるのはなぜですか。解答らんんに二行以内で具体的に説明しなさい。

## 問六

□ A □ D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア たとえば    イ しかし    ウ したがって    エ そもそも

## 問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

## 問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は知覚経験の中で生きているが、そのことを意識する機会は少なく、美しさや心地よさを感じているときに、その経験の例外性という危機感の中で、ようやく知覚経験を意識することができる。

イ 人が知覚経験の中で生きていることは自明のことであり、経験が危機に瀕して日常性が成り立たなくなったときにのみ、改めて知覚経験を意識することができる。

ウ 人は知覚経験の中で生きているが、そのことを意識する機会は少なく、経験が危機に瀕して日常性が成り立たなくなったときや、日常生活の中でも空間性をもって場に包まれるときに、際立って意識される。

エ 人が知覚経験の中で生きていることは自明のことであり、日常・非日常を問わず、平穏さや危機感の中で絶えず知覚経験を意識することができる。



## 2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今年の4月、祐也は中学生になった。兄の秀也は東北大学医学部に進学した。医学部は合格するのも大変だが、入学してからがさらにいそがしくなるという。じつさい、仙台での慣れない独り暮らしで、兄はかなり苦労しているようだった。それでも兄は祐也のことを気にかけて、電話のたびに、将棋も勉強もがんばるようにと励ましてくれた。

祐也は、勉強ではとても兄にかなわなかった。父も母も、それはしかたがないと思っているようなのが悔しかった。

「<sup>(1)</sup>絶対に棋士になつてやる」

祐也は毎日のように誓ったが、負けたくない気持ち先が先に立ち、思いついた将棋が指せなくなっていた。とくに自分より実力が上のCクラスが相手だと、ほとんど勝てない。これでは、まぐれで奨励会試験に合格しても、そこから先はさらに険しい道のりになる。金剛さんも、江幡さんも、奨励会の途中でプロになるのを断念していた。

しかし、プロの棋士になる以外に、国立大学の医学部に現役で合格した兄と肩を並べる方法はない。棋士になれば、兄に対して引け目を感じなくて済む。

<sup>(2)</sup>中学生になつてから、祐也は夜中に目をさますことが増えた。授業中も、ふと気がつくとき将棋のことを考えている。反対に、将棋を指しているときには、学校の勉強をおろそかにしていることが気になつてしまう。

それでも、1学期の成績はそこそこ良かった。がんばれば、もつと点を取れたはずだが、8月半ばに2度目の奨励会試験をひかえていたので、祐也は期末テストの前日もネット将棋を5局も指した。

それだけに、奨励会試験には万全の態勢でのぞんだ。初日の研修会員どうしでの対局はなんとか勝ち越したが、2日目の奨励会員との対戦では1勝もあげられなかった。技術よりも気魄で圧倒されて、祐也は落ちこんだ。「みんな、鬼のようだった。おれは、とてもあんなふうにはなれない」

内心で白旗をあげながらも、祐也は両親と兄にむかい、来年こそは奨励会試験に合格してみせると意気込みを語った。両親と兄も、がんばるようにと言ってくれた。しかし、将棋にうそはつけない。祐也は研修会の対局でさっぱり勝てなくなった。

中学校の勉強もしだいに難しくなり、2学期の中間テストではどの教科

30

25

20

15

10

5

も10点以上点数をさげた。数学と理科にいたっては赤点に近かった。驚いた両親はテストの解答用紙を見て、祐也がいかに勉強していなかったかを見抜いた。二人とも教師だけに、感情にまかせて怒鳴ることはなかったが、祐也は立つ瀬がなかった。

「将棋と勉強を両立させてみせるというおまえのことは信じてきたが、あれはうそだったのか」

「将棋のプロになれるかどうか不安で勉強が手につかなかったというなら、もう将棋はさせられないぞ」

おもに父が話し、母は悲しそうな顔でじつと考えこんでいた。2学期の期末テストで点数がさらに落ちるようなら将棋はやめると、祐也は誓った。

しかし、背水の陣を敷いても、なにも変わらなかった。あいかわらず、授業中には将棋のことを考えてしまい、研修会での対局中に苦手な数学や理科のことが頭をよぎる。まさに悪循環で、なんでもない局面なのに迷いが生じ、つまらないミスをおかして、負けを重ねた。10月の第2日曜日には、ついに初の4連敗をきって二度目の降級点を取り、祐也はC2からD1に降級した。

その後は持ち直したが、前回、11月第4日曜日の研修会で再び4連敗して、気持ちが折れた。今日も、正直に言えば、研修会にくるのがこわかった。自信を失った状態で勝てるほど、研修会の将棋は甘くない。

悪い予感も当たり、祐也は午前中の2局に連敗して降級点がついた。立ち直りのきっかけすらつかめない、最悪の内容だった。

これまでは、午前中の対局で2連敗しても、お昼に父と電話で話すうちに気力がわいた。しかし、祐也はもはや<sup>(3)</sup>虚勢を張ることすらできなかった。

(中略)

やがて1時15分が近づき、ひとりまたひとりと対局場である大広間にむかっていく。祐也も桂の間を出て盤の前にすわったが、とたんに緊張して、呼吸が浅くなるのがわかった。

3局目の将棋も、まるでいいところなかった。飛車を振る位置を三度も変える体たらくで、かつてなくみじめな敗戦だった。

4局目も、中盤の入り口で、銀をタダで取られるミスをした。祐也は大広間から廊下に出て、頭を抱えた。

「祐也」

60

55

50

45

40

35

呼ばれて顔をあげると、★三和土に背広を着た父が立っていた。

「どうした？」

心配顔の父に聞かれて、祐也は4連敗しそうだと聞いた。

「そうか。それじゃあ、もう休もう。ずいぶん、苦しかったろう」

(4) 祐也は父に歩みよった。肩に手を置かれて、その手で背中をさすられた。

「挽回できそうにないのか？」

手を離れた父が一歩さがって聞いた。

「無理だと思っ」

祐也は目を伏せた。

「そうか。それでも最後まで最善を尽くしてきなさい」

「わかった」

父に背をむけて、祐也は大広間に戻った。どう見ても逆転などあり得ない状況で、こんな将棋にしまった自分が情けなかった。

10手後、祐也は頭をさげた。次回の、今年最後の研修会で1局目から3連勝しないかぎり、D1で2度目の降級点がつき、D2に落ちる。これでは奨励会試験に合格するはずがない。しかし、そんなことよりも、いまのままでは、将棋自体が嫌いになりそうで、それがなによりこわかった。

祐也はボディーパーバグを持ち、大広間を出た。

「負けたのか？」

父に聞かれて、祐也はうなずいた。そのまま二人で1階まで階段をおりて、JR千駄ヶ谷駅へと続く道を歩いていく。いきには気づかなかつたが、街はクリスマス飾りでいっぱいだった。

「プロを目ざすのは、もうやめにしなさい」

祐也より頭ひとつ大きな父が言った。

「2週間後の研修会を最後にして、少し将棋を休むといい。いまのままだと、きみは取り返しのつかないことになる。わかったね？」

「はい」

そう答えた祐也の目から涙が流れた。足が止まり、あふれた涙が頬をつたって、地面にぼとぼと落ちていく。胸がわななき、祐也はしゃくりあげた。こんなふうに泣くのは、保育園の年少組以来だ。身も世もなく泣きじゃくるうちに、ずっと頭をおおっていたモヤが晴れていくのがわかった。

「将棋をやめると言っているんじゃない。将棋は、一生をかけて、指していけばいい。しかし、おとしの10月に研修会に入ってから、きみはあき

95

90

85

80

75

70

65

らかにおかしかった。おとうさんも、おかあさんも、気づいてはいたんだが、将棋については素人同然だから、どうやってとめていいか、わからなかった。2年と2ヵ月、よくがんばった。今日まで、ひとりりで苦しませて、申しわけなかった」

父が頭をさげた。

「そんなことはない」

祐也は首を横にふった。

「たぶん、きみは、秀也が国立大学の医学部に現役合格したことで、相当なプレッシャーを感じていたんだろう」

父はそれから、ひとの成長のペースは(5)千差万別なのだから、あわてる必要はないという意味の話をした。

千駄ヶ谷駅で総武線に乗ってからも、父は、世間の誰もが感心したり、褒めそやしたりする能力だけが人間の可能性ではないのだということを知りやすく話してくれた。

「すぐには気持ち切り換えられないだろうが、まだ中学1年生の12月なんだから、いくらでも挽回はきく。高校は、偏差値よりも、将棋部があるかどうかで選ぶといい。そして、自分なりの将棋の楽しみかたを見つけてんだ」

ありがたい話だと思ったが、祐也はしだいに眠たくなってきた。錦糸町駅で乗り換えた東京メトロ半蔵門線のシートにすわるなり、(6)祐也は眠りに落ちた。

午後6時すぎに家に着くと、玄関で母がむかえてくれた。

「祐ちゃん、お帰りなさい。お風呂が沸いているから、そのまま入ったら」いつもどおり、張り切った声で話す母に、祐也は顔がほころんだ。

浴槽につかっているあいだも、夕飯のあいだも、祐也は何度も眠りかけた。2年と2ヵ月、研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たかった。

悲しみにおそわれたのは、ベッドに入ってからだ。

「もう、棋士にはなれないんだ」

祐也の目から涙があふれた。布団をかぶって泣いているうちに眠ってしまった、ふと目をさますと夜中の1時すぎだった。父と母も眠っているらしく、家のなかには物音ひとつしなかった。

常夜灯がついた部屋で、ベッドのうえに正座をすると、祐也は将棋をおぼえてからの日々を思い返した。米村君はどうしているだろう。中学受験

125

120

115

110

105

100

130

をして都内の私立に進んでしまったが、いまでも将棋を指しているだろうか。いつか野崎君と、どんな気持ちで研修会に通っていたのかを話してみたい。

祐也は、頭のなかで今日の4局を並べ直した。どれもひどい将棋だと思っていたが、1局目と2局目はミスをしたところで正しく指していれば、優勢に持ち込めたことがわかった。

「おれは将棋が好きだ。プロにはなれなかったけど、それでも将棋が好きだ」うそ偽りのない思いにからだをふるわせながら、祐也はベッドに横になり、深い眠りに落ちていった。

(佐川光晴『駒音高く』)

★奨励会試験………将棋では、プロになるには奨励会試験に合格する必要がある。祐也は、現在、その前段階の研修会に所属している。

★三和土………コンクリートや土でかためた、台所やげんかんなどの土間。

問一——(1)「絶対に棋士になってやる」とありますが、このように祐也が決意したのはなぜですか。解答らんに行以内で説明しなさい。

問二——(2)「中学生になってから、祐也は夜中に目をさますことが増えた。」とありますが、その時の心情を解答らんに行以内で説明しなさい。

問三——(3)「虚勢を張る」とありますが、祐也が虚勢を張っている様子がわかる具体的な四十字以上の一文を抜き出し、最初の五字を書きなさい。

問四——(4)「祐也は父に歩みよった。」とありますが、これはどのような状況ですか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 四連敗しそうでも苦しい中、父に優しい言葉をかけられて、本当は弱音を吐きたいのに言えずに葛藤している状況。

イ 挽回できそうにない中、駆け付けてくれた父の姿を思いがけず発見し、今までの応援を考えると立つ瀬がなく、謝ろうとしている状況。

ウ 挽回できそうにない中、心配して駆け付けてくれた父に対して、何とか期待に応えられるようにしたいと思っている状況。

エ 四連敗しそうでも苦しい中、父に言葉をかけられて、思わず父の優しさにすがろうとしている状況。

#### 問五

——(5)「千差万別」とありますが、数字を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 三つ子の魂百まで

二 一か八か

三 口八丁手八丁

四 腹に一物

五 起きて半畳寝て一畳

「意味」

ア うまくいくかわからないが、成り行きにまかせること。

イ 心中に何か悪いたくらみをもっていること。

ウ 必要以上にものをほしがるのはつまらないことだということ。

エ 言うこともすることも達者な人ということ。

オ 幼いころの性質は、年をとっても変わらないということ。

## 問六

——(6)「祐也は眠りに落ちた。」とありますが、その理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父の話はありがたいものであったが、教員であるがゆえに教訓めいたものも含まれており、反抗期の祐也にとっては退屈だったから。

イ 父の話はありがたいものであったが、祐也は心の中では棋士になる夢を捨てておらず、関心が持てなかったから。

ウ 二年二か月にも及ぶ研修会員としての生活は強い緊張感を伴うものであり、張りつめていた気持ちがあるから。

エ 二年二か月にも及ぶ研修会員としての生活は強い緊張感を伴うものであり、将棋を指す生活に終止符を打てることにほっとしたから。

## 問七

この作品全体を通じて、祐也の将棋への向きあい方はどのように変化しましたか。解答らんんに三行以内で説明しなさい。

## 問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父は、祐也が将棋のプロになることより普通の中学生としての生活をするを願っており、勉強との両立を宣言しておきながらできていない息子に対して、苦々しい思いで論じている。

イ 父は、祐也が将棋を休むことはやむをえないと考えており、ひとの成長のペースは千差万別なので進路についても世間の評価にとらわれることなく自分らしい選択をすればよいと論じている。

ウ 父は、祐也に対して将棋を休めばよいとずっと考えているが、それぞれの特性にあった能力を伸ばすことが何よりも大切だと思っているので言い出さず、長い目で成長を見守っている。

エ 父は、自分こそが祐也に将棋をやめることを言い渡さなければいけないと思っており、厳しい口調で話をしたが、人間の可能性について話すなど父親としての愛情に満ちた人物である。









